AIブログ要約

2026/11/17

アルコール検知器はどう選ぶ？運送会社が知っておきたい仕組みと比較のポイント

【記事の要点３つ】

✅ アルコール検知器には半導体式と燃料電池式があり、測定方式によって特性が異なる。業務用製品は測定だけでなく、自動記録やデータ共有、点呼システムとの連携など、管理業務の効率化にも役立つ。

✅ アルコール検知器は飲食物によって反応する場合もあるため、異常検知時には適切な確認が必要。また、飲酒運転防止には日常的な点検・交換と、法令に基づく点呼記録の保存が欠かせない。

✅ 機器選びでは、会社の規模や測定場所、記録管理の負担を踏まえ、必要な機能を見極めることが重要。本体価格だけでなく、保守費用やクラウド利用料、管理業務にかかる時間も含めて比較する。

アルコール検知器の仕組みと運送会社に適した選び方

アルコール検知器は、運送会社が日々の点呼で飲酒運転を防止するために欠かせない機器です。主な測定方式には、電気抵抗の変化を利用する「半導体式」と、アルコールの化学反応で生じる電流を測定する「燃料電池式」があります。燃料電池式は一般にアルコールを選択的に検知しやすい特徴がありますが、測定精度は方式だけで決まるものではなく、適切な使用と保守管理が重要です。

また、飲酒していなくても、パンや栄養ドリンクなどの飲食物が測定結果に影響する場合があります。アルコールが検知された際は、自己判断で問題なしとせず、出発を保留して原因を確認する必要があります。呼気中アルコール濃度0.15mg/Lは酒気帯び運転の罰則に関わる基準であり、それ未満であれば飲酒運転が認められるわけではありません。

運送会社には、アルコール検知器の適切な維持管理も求められます。日常的な機器の状態確認に加え、少なくとも週1回以上の作動確認を行い、製品ごとに定められた使用期間や測定回数に応じて交換することが大切です。また、トラック運送事業では点呼記録を1年間保存する必要があり、測定結果だけでなく、確認事項や指示内容も適切に管理しなければなりません。

アルコール検知器を選ぶ際は、測定精度や価格だけでなく、自社の点呼業務に合った機能を備えているかが重要です。業務用製品には、測定結果の自動保存、クラウドでの情報共有、本人確認、点呼システムとの連携など、記録管理や確認作業を効率化する機能があります。

特に、複数の営業所や外出先で測定する場合は、データ共有機能が業務負担の軽減につながります。一方、現在の機器で問題なく運用できている場合は、必ずしも高機能な製品へ買い替える必要はありません。

導入時には、本体価格に加えて、センサー交換費用、保守費用、クラウド利用料、周辺機器の費用なども確認することが大切です。自社の運用状況や課題を整理し、必要な機能と継続的な運用コストを総合的に比較することが、最適なアルコール検知器選びにつながります。

元の記事を読む

株式会社タイガー
東京都千代田区神田猿楽町2-1-14 A&Xビル2F
https://www.tiger-inc.co.jp/
03-5283-7232

物流ソリューションエキスパート
株式会社タイガー

本要約は上部に記載の日付に作成しております。内容について最新のものでない可能性があるので予めご了承ください。